

# 関西 ECOMAIL 第43号



# ECOMAIL 10

## 関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

## 国際シンポジウム'98 開催迫る！！

「環境倫理と環境教育－科学技術と人間性をめぐって－」

3月20日(日)～3月22日(日) 甲南大学

3月20日(金)から22日(日)まで甲南大学(神戸岡本)にて国際シンポジウム'98が開催されます。1996年に次いで2度目の国際シンポジウムになりますが、今回は中国、タイ、カナダ、韓国、オーストラリアそして日本から環境教育や環境倫理の専門家をお招きして「環境倫理と環境教育－科学技術と人間性をめぐって－」というテーマのもとで、シンポジウム1では「科学技術と自然環境」について、シンポジウム2では「人間性と社会環境」について議論します。そしてシンポジウム3ではそれらの意見を統合し、総合討論を行います(すべて日本語に逐次通訳)。内容的には人権問題や環境政策、エネルギー問題そして、環境ホルモンなどのアップトゥーデイトな問題にまで触れ、21世紀に向けた環境教育の発展とそのベースとなる環境倫理の理念について討論する予定です。さらに今回は初日の20日(金)に日中学生会議を行います。環境問題が地球規模で広がるなか、環境教育・環境倫理も国境をこえたコミュニケーションが必要となってきました。ここでは甲南大学の学生と中国北京大学の学生が地球環境の改善のために討論を行います。学生の皆さんの参加も大歓迎です。みなさまふるってご参加ください。なお、期日も迫っておりますので、お申し込みはお早めをお願いいたします。また、ファックス(078-435-2368)でのお申し込みも可能です。

### 国際シンポジウム'98日程

3月20日(金) プレ・シンポジウム

10:10～13:30 学生会議、15:40～17:10 特別講演

3月21日(土) シンポジウム 第1日目

10:10～15:00 記念講演、15:10～17:40 シンポジウムI

3月22日(日) シンポジウム 第2日目

10:10～12:40 シンポジウムII、14:30～17:00 シンポジウムIII(詳しくはパンフレット参照)

### 第43号 目次

- 国際シンポジウム'98(甲南大学) 記念講演者の紹介 ……2
- 国際シンポジウム'98 学生会議のご案内(天野雅夫) ……3
- 日本環境教育学会第9回大会 特別企画講演会場でコメントを!(福島古) ……4
- 日本環境教育学会第9回大会 フィールドワークショップの御案内(本庄真) ……5
- 第41回関西支部ワークショップ報告(本庄真) ……5-6
- 日本環境教育学会関西支部第6回大会シンポジウム報告(山本幹彦) ……7
- ネットワーク ……8

## 国際シンポジウム'98（甲南大学）記念講演者の紹介

田 徳 祥 Tian Dexiang 氏 特別・記念講演, シンポジウム I, III パネリスト

北京大学環境保護局所長。原子物理学専攻。北京大学教授として、放射線の防護と管理について調査研究や指導を行ってきた。1991年に環境保護の研究に転向。学生を中心にした北京大学「環境と発展」協会の顧問。北京大学における環境教育の発展に尽力し、学生の指導にも力を入れる。おだやかな人物。主著『放射線防護入門』『環境汚染と健康』他。

シリワット・ソンドロトック Siritwat Soondarotok 氏 記念講演, シンポジウム I, III パネリスト

タイ・ラジャバト王立研究所助教授。ラジャバト王立研究所は105年の伝統をもつ教育大学大学院で3年前に現在の所名に改名した。昼間と夜間のクラスがあり、学生の教育だけでなく、在職教師の再教育も行っている。ソンドロトック氏はタイで環境教育の専門家として認められ、学生の環境キャンプなどの実践活動を指導している。キャンパス内の畑やフィールドで多くの実践的授業を展開。タイにおける環境教育の指導的立場にいる。環境教育マネージメントや野外活動についての書物を出版。

ナンシー・ターナ Nancy J. Turner 氏 記念講演, シンポジウム I, III パネリスト

カナダ・ヴィクトリア大学環境学科教授。ファーストネイションの人権や生活・文化の保護に努力している。人柄が大変優しい。カナダ・ファーストネイション（カナダ沿岸先住民、内陸先住民）の植物に関する知識、言葉や口承・物語、薬草によるヘルスケア、伝統技術や食文化などについて研究。特に植物を栄養学的観点から考察。1997年、環境YM-YWCA賞の優秀賞を受賞。ワシントンD.C.の「癒しの森林保存リチャード・エヴァンス・スカルティ」優秀民族植物学者賞・受賞。

李 時 載 Seejae Lee 氏 記念講演, シンポジウム II, III パネリスト

韓国カトリック大学教授。市民環境学研究所所長。東京大学で学位を取得し、日本語が非常に堪能。論文は「韓国の環境社会学、東アジアの環境連合の形成のために」（環境社会学研究）「ごみ問題の社会学的研究—自治体、企業、市民の社会的協同と背理のメカニズムを中心に」（日本環境社会学学会）等がある。環境政策や社会教育また環境教育について社会学的立場から研究。

リチャード・スミス Richard Smith 氏 記念講演, シンポジウム II, III パネリスト

オーストラリア環境教育誌編集長。オーストラリア国内外で、環境教育協会のもとで編集・宣伝活動をしている。実践で鍛え上げられた感性と理論的研究のバランスのとれた人物。1996年、京都大学120周年記念国際環境教育シンポジウムに招聘され、「オーストラリアの環境問題と環境教育」という題目で講演。発達教育の立場から環境教育について研究。

鈴木 善次 Zenji Suzuki 氏 記念講演, シンポジウム I コメンテーター

大阪教育大学教授。日本環境教育学会事務局長、レイチェル・カーソン日本協会代表理事。日本における環境教育の普及をその初期から支えてきた。科学教育、理科教育の立場から環境教育を考察し、また優生学に対する批判などを通して環境教育のありかたを問う。「こどもエコクラブ」や「環境教育フェア」を指導し、大阪府の環境行政にも深く関わってきた。主著『人間環境教育論』（創元社）、『日本の優生学』（三共出版）、『地球規模の環境教育』（共著、ぎょうせい）その他多数。

今回は、パネリストの紹介をご覧になっても分かりますように、各パネリストのみなさんには理論的な議論ばかりでなく、実践的・具体的なお話もしていただく予定です。開催がせまっておりますが、たくさんの方々のご参加をお願いいたします。

## 国際シンポジウム'98 学生会議のご案内

天野雅夫（国際シンポジウム'98 実行委員）

環境破壊が地球規模で進行しているなか、わたしたちにはいったいなにができるのであろうか。日本では1960年代から1970年代にかけて高度経済成長に伴った環境破壊が「公害問題」として社会的にクローズアップされた。水俣病の原因が企業による環境破壊によるものであるということが動物実験によって明らかになったのが1960年代前半、新潟水俣病が発生したのが1964年、そして1970年代にはサリドマイド事件や奇形サル問題などが社会問題として注目されるようになった。その間、経済の急成長に伴う工・産業の発達は日本の社会に物質文明を定着させただけでなく、同時に深刻な環境破壊を引き起こし、人々の健康にまで大きな被害を与えるようになっていった。このような「外なる環境」が次々と破壊されていった結果、「内なる環境」つまり精神までもが破壊されてきているというのが現状なのである。これは日本だけに限ったことではない。カナダ先住民のなかでも水俣病が発生し、北欧では森林や湖を破壊する酸性雨が問題になり、海洋汚染は世界各地の沿岸の生態系に大きな影響を与えている。さらに地球規模ではフロンガスによるオゾン層の破壊やCO<sub>2</sub>による地球温暖化の問題が表面化してきている。

昨年12月に京都で第三回気候変動条約会議（COP3）が開かれたが、環境問題はこうした政府間の条約だけにかかわる問題ではない。持続可能な社会を構築するということは、わたしたち一般市民にとっても重要なことであり、そのためには政府、企業、教育機関そして家庭などが一体となって真剣に議論しなければならないだろう。そしてそれ以上に、これからの社会を担って立つ若者たちが環境問題に対して十分に考察し、世界的な規模で意見を交換する必要性が生じてきている。

このような状況のなか、甲南大学では中国北京大学の学生と甲南大学の学生による『国際学生会議「未来の地球環境を考える」－日本と中国の連携－』（3月20日金曜日）を企画している。会議の内容は日本側の発表として1)「自然環境における生態系のゆらぎ－奇形ザル調査から－」、2)「日本における社会環境の問題－環境問題とリサイクル－」、3)「成熟できない若者の心の環境」、4)「環境倫理と環境教育」を行い、中国側の発表として、1)「中国の大学における学生環境保護組織による持続可能な発展の分析」、2)「Shenzhen市の環境の質及び汚染」、3)「環境倫理と持続可能な発展」を行う。日本側は高度経済成長を通して発生した公害問題、環境問題について述べると同時にそれによって引き起こされた社会問題や若者の「心の環境」の問題にまで深めて討論する。中国側は高度経済成長の最中にある状態を報告するとともに、持続可能な発展という観点から地球環境の未来について討論する。そして総合討論では、経済段階を異にする両国がどのように協調し、また連携することができるのかということを探ってゆく。環境問題における国際的な連携という課題に興味のある方は是非御参加下さい。詳しくは同封のパンフレットをご参照下さい。

# 日本環境教育学会大阪大会 2 日目は 特別企画講演会場でコメントを！

福島 古（第9回大阪大会特別企画実行委員）

## （1）特別企画のプログラム構成

特別企画テーマ「現在の環境教育に欠けているもの」の論議展開について本テーマで特別企画講演を募集した結果、その関心の高さに比例する2会場での同時進行という展開となりました。16本の講演を15分間以内でして頂く関係から、このような選択となってまいりました。B会場では、学校教育に関連した発表をして頂き、A会場ではその他の分野に於ける環境教育に欠けているものについて発表をして頂くことにしています。その後、短時間ではありますが、A会場に於いて合同討論を行うことにしています。この討論形式としては、予め参加者の皆さんにお渡ししておいたリクエスト用紙にコメントを記入して頂いたものを最大限活用したいと考えています。時間的な点も考慮して、参加者の皆さんにはご自分のコメントをこの合同討論の開始までに提出しておいて下さるようお願い致します。また、発表者の皆さんにはこのリクエストを受けてのコメントを、座長には各会場での論議のまとめをその場でして頂くこととなりますので宜しくお願い致します。（ここでの論議が、シンポジウムにも連動して行くという全体のプログラム構成になっています。）

## （2）テーマ設定の意義について

本テーマ設定にあたっては、大会テーマの有無や大会日程の構成をめぐって実行委員会内で相当激しい論議をしてきた。これは全て、日本環境教育学会結成10年を目前にして、また21世紀を迎えるに当たって、より一層の日本環境教育学会の発展を祈念するからにほかならない。このような論議なくしては、量的にも質的にも、グローバルにもローカルにも対応していける組織形態の実現が加速度的進展を遂げる可能性は少なくなると言わざるをえない。もとより、環境教育の命題「環境を全体として考えなければならない」を遂行して行くためには、より多面的・総合的な観点と共に他分野との連携・共同などの行動的・实际的・現実的な指針を確立し、「教育」そのものの意義を再認識すべく誘導する根幹ともなるべき「環境教育学」の構築が課題となる。もはや日本の、世界の現状は各分野からの環境教育への「啓発的」参入ですまされる程「悠長」にはしてはられないし、まして、このままで「幕引き」することなど到底許されない。

## 5月22日は明日香の里にどうぞ！

本庄眞（奈良環境教育研究会・第9回大会実行委員）

この度、日本環境教育学会第9回大会のプレイベントとして、5月22日（金）の午後よりフィールドワークショップを企画しております。今回のフィールドとなる飛鳥川上流の「稲淵」は、1300年以上も悠久の歴史があると共に、今もなお脈々と里での生活が営まれ、文化が伝承されている地域です。最近、「棚田のオーナー制度」といった新しい活動も促進されております。

フィールドワークでは、明日香の里を実際に歩き、そこに生きる住民の話に耳を傾けるといった新しい試みを行いながら、現在の環境教育に欠けているものを今一度顧みて、明日香の里から21世紀の環境教育の方向を発信できればと考えております。

今回のフィールドワークショップでは、次の4つのテーマを軸に展開したいと考えています。

- 田舎と町を結ぶ、エコミュージアム
- 自然科学と人文科学を結ぶ「自然文化誌研究」
- 先人の知恵に学ぶ
- 奈良独自の環境教育への模索

詳細は、大会資料などを参考にして下さい。会員以外でも参加できますのでお気軽にどうぞ！

## 第41回関西支部ワークショップ報告にかえて

本庄眞（奈良環境教育研究会）

第41回関西支部ワークショップ「環境問題の基本」（95/6/17）で話題提供をされた梅津先生は、このワークショップでのお話が最後の講演となりました。大学時代と変わらぬ熱のこもった講演を聞いたのは、私にとって幸せでした。大阪に来られたときは、既に大腸癌の手術を受けられた後であり、容体を心配された奥様も一緒に、名古屋から来ていただきました。講演後、しばらくして病気を再発され、ついに帰らぬ人となってしまいました。ご冥福をお祈りすると同時に、以下の新聞の記事をもって先生の報告にかえさせていただきます。

## ブレイクの現代的意義

そもそもすぐれた文学というものには、現代的意義などというものを持たないはずのものである。すぐれた文学は、人間の正味というか、掛け値なしの、または希望的観測を含まない人間の實力というか、そういうものを、時代と場所の隔たりをこえて示しているのであって、そういう人間の正味を語っている点で、ホメロスが古くなってしまったということはないのである。

### 愚なる人間への愛

私がこのほど全訳を終えたイギリスの彫版師で詩人のウィリアム・ブレイク（1757-1827）も、例えば三十歳代の半ばの言葉「実行されない欲望を育てるよりはいつそ揺りかごの中のおさなごを殺せ」が示しているように、いのちが阻まれぬ世界の到来を激しく望んだ人であったが、同時に、この人間の實力を見極める鋭さ、冷静さ、非情さにおいて、人後に落ちる人ではなかった。同じ頃の「切られたみみずは鋤を許す」という言葉は、畑を耕すのに、みみずを切らないように耕せということは、百メートルを三秒で走れということと同じで、人間には無理な注文であることを明確に知っていたブレイクを語っている。やはり同じ頃の「どんな鳥も高すぎて舞い上がることはない、もし自分自身の翼で舞い上がるならば」とか、四十歳代半ばの「人間以上であろうと試みると我々は以下になる」という言葉も、人間の實力にとって高すぎる理想をもつことを非とするブレイクの立場を証している。

こういう、いわば人間の「百点つかなさ」の認識が、「あらゆる売春婦はかつては処女で、あらゆる犯罪者はおさないとし子であったのだ」「各人の不徳の相互の許し／そういうものが楽園の門である」というブレイク最晩年の愛の境地を導くに至っているのも、至極当然のことであった。そして、この人間の「百点つかなさ」の動かない認識、更にその認識から必然的に出てくる、愚かなる人間への愛こそは、実はすぐ

れた文学一般に通じる大きな特徴であったのである。この特徴は、最初に言ったことと矛盾するようであるが、すぐれた文学一般の、更には、もちろんブレイクの、大きな現代的意義の内容となっていると考えられる。

### 技術の招いたもの

現代は、科学技術の飛躍的進歩の時代、いわゆる技術革新の時代で、第二または第三の産業革命と呼ばれたりしているわけであるが、例えば、十年前の三月に起こった米スリーマイル島原子力発電所の重大事故の直後、当時稼動していた全米七〇余基の中央制御室で通勤している特殊技術者全員に操作についての試験をしたところ、六三%の者が不合格であったことが端的に示す如く、この技術革新が、人間の實力にとっては、ますます速すぎるもの、ますます精密すぎるものを日々生み出している事態は、改めて人間の實力の確かな認識、それに基づく人間の實力の主張、人間の愚の主張を緊急のこととしており、このことが、人間の實力を描き続けて来たすぐれた文学の、かつてないいわば出番を、極めて強くわれわれに求めさせることになっているのである。

自然科学の成果をば、目前の目的のために利用しているにすぎない人間、どうひいき目に見てもそれ以上ではない人間、そういう人間が招いている温室効果、異常気象、酸性雨、フロンによるオゾン層の破壊、産業廃棄物による地下水の汚染などなど。人間の實力の正確な認識が今ほど必要な時代は、人類の歴史上、恐らく一度もなかった。文学の出番を言う所以である。加えてブレイクは自ら自然科学の激しい批判者であった。例えばわが国の雑誌『自然』1976年6月号も、その「ミニスコープ」なる欄において、無記名の「科学批判の先駆者ブレイク」という記事を載せている。第一の産業革命の正に全期間を生きていたブレイクは、過去の権威を教え込む学校教育というものを全く受けなかったが故に、また

多分は天才が持つ生得の平衡感覚の故に、当時の自然科学の思想的及び実際の権威、バイコン、ロック、ニュートンを批判して譲らなかったのである。

### 生態学的な視点も

ブレイクは更に、今日しきりに問題とされる生態学の原理に気づいていた可能性がある。先に引用した「きられたみみずは鋤を許す」も、生命の尊厳は、一切の生命を殺さないことであるという如き単純なものではないという意味を含み得る点で、生態学的であるとする事ができる。さらに四十歳代半ば頃の「むごい扱いを受ける小羊は公の争いをかもし出す／しかもなお屠殺人のほうちようを許す」「蠅を殺す気まくれな男の子は／蜘蛛のうらみを感じることにしよう」などという言葉は、はつきりと生態学的見方を示すもので、教育よりは己の正直で素朴な目を信じた人間の、予言者の力をよく例示していると言い得る。

ブレイク的全訳を終えて思うもう一つのこと、流行で事をする、度を越した我が国の「習慣」のことである。ブレイクが世界的に流行したのは、その死後百年の頃であったが、その波に棹さして当時の『英語青年』は五号ものブレイク特集を出したのであった。しかし、その生誕二百年を記念する同誌の同じ特集号は、一号きりであったし、岩波、新潮社文庫にあった詩集も、とくに絶版になっている。ブレイクの時代的意義はむしろより大きくなっているのに、である。（名古屋大学名誉教授、英文学1989・6・12）

梅津清美 うめつなるみ 1917年、山形県生まれ。東京文理科大学英語英文学科卒。著訳書に『ブレイク研究』『ブレイクの手紙』『素人の立場』『ブレイクを語る』『文明を問い直す』など。今月下旬、名古屋大学出版会から『ブレイク全著作』を出版する。〔朝日新聞 1989年6月16日夕刊 文化欄より引用〕

## COP3が置いていった環境教育への課題

山本幹彦（第6回支部大会実行委員・京都ユースホステル協会）

『COP3が終わった。』いったいCOP3は何を私たちに残していったのだろうか？

京都では昨年の春からCOP3関係のイベントが非常に多かった。特に秋以降は、週末ともなるといくつもの事業が重なった。そして、あるところでは集まりの悪いところもあり、「人の取り合い」といった冗談まで聞かれた。

そんな中で、高校生を対象とした『COP3・高校生セッション“温暖化防止へのわたしたちの提言”』を期間中の夜に催した。

この試みは、COP3では未来世代への影響を話し合っているにも関わらず、ティーンエイジャーの声がなかなか伝わってこないと聞かれたものです。試験を来週に控えているにも関わらず、17名の高校生が集まってくれた。またゲストにCANのメンバーでインドネシアからお越しの Anung Karyadi さんとルーマニアからお越しの Lavinia Andrei さんにこの場に来ていただいた。ゲストのスピーチのあと、質問が出た。

「温暖化によって南極の氷が融けると水が増えて、島が沈む。日本も沈むかと思う。世界であと沈まない所は何個くらいある？（笑い）沈む国に住んでいる人々は沈まない国にみんないけるの？」ゲストの Anung Karyadi さんが丁寧に答えてくれた。「インドネシアは太平洋の東。すべての島は海に囲まれている。海面が上昇するとバリは沈む。高いところにある島に移動できたとしても食糧生産はどうするのか。アジアは海抜の低いところが多くそういったところで米を造っている。米は低地でしかできない。ジャワには1億1千万人いる。もし海面が上昇すると多くの人々が高い所に移動したとしても食糧は飲み水はどうするのか。小さい島々は、国自体が消滅するという事態になりかねない。」さらにこんな質問が続いた。「国が消滅するということはどういうこと？」ついに、Anung Karyadi さんに基本的な温暖化のレクチャーをしていただくことにした。いったい彼らに今回の会議のことは伝わっていなかったのだろうか？ その回答はこうだった。「難しい。会議でも難しくしている感じがする。拒否反応という感じ。言葉もやっていることも普段のフレンドリーな感じではない。外国からたくさんの方が来て会議をやっているなどは思うし、関心はあるが、自分で調べてみるということにはできない。うわべだけといった感じ。だいたいのはわかっていることをやっているのなかなか知る機会がない。」そしてこんな質問が、「温暖化の会議に参加しているのはどういう人ですか。偉い人ですか。温暖化で破壊された資源、それを修復するのにかかる時間は？ 南極の氷がとけたらもどるの？」はじめ考えていた『高校生の提言』というのは、COP3ではなくて、私たちに向けられてきた。「アメリカや日本が何%とかいうだけで、削減のためにどうしているのかわからない。ニュース以外のものに興味がひかれる。周りの大人や先生が道しるべになってほしい。私たちの時代なのに、わからないのはおかしい。それを教えるのが大人の役割。」

以上、簡単にその時の模様を紹介した。当初ねらっていたことと話の内容は違ったが、これまでCOP3に関連して感じていたことがはっきりした。何度か私も京都国際会議場に足を運んだ。そして、会議場の中と外とのまったく違った雰囲気戸惑っていた。ほとんどの京都市民にとって、関心はあったかも知れないが、よそ事ではなかったようにしか思えない。その温度差の大きさに戸惑っていたのである。この時の高校生のように、私たちは本当に関心のない人たちに対して、わかってもらえるような方法でアプローチしていたのだろうか？ …人よがりにならないような環境教育、私たちの社会の問題としてとらえながら、行動していける市民・を育てていくことが環境教育なのだ改めてわかった。

# ネットワーク

「大和川を取り戻そう！ 地域ぐるみの環境保全・美化活動」

地球にやさしい暮らしを「スミノエコロジー'98」

◎主催：住之江区役所（大阪市住之江区御崎3-1-17 TEL 06-683-1234）

◎日時：3月29日（日）11:00～14:00

◎場所：住之江区役所および区役所北側グラウンド

◎内容：

○リサイクル・遊びコーナー

- ・ソーラーカー試乗
- ・身近な自然素材を使っての木工細工
- ・食用廃油を使ってのキャンドル作り
- ・パッチワーク・紙すきはがき作り
- ・リサイクルマーケット

○エコ・キッチンコーナー

- ・無農薬野菜販売
- ・無添加「みそ」の販売
- ・「ヤサイクル（野菜ごみをださない）」料理紹介
- ・「野草料理」紹介

○自然・環境コーナー

- ・地球温暖化防止パネル展示
- ・大和川写真展
- ・こどもたちの環境絵画展

これらをはじめ、家族連れで楽しみながら、環境問題を考えていただけるような企画をそろえています。

## 牛乳パック作品作り教室

◎日時：3月22日（日）10:00～12:00

◎場所：千里リサイクルプラザ TEL 06-877-5300

◎内容：牛乳パックを使って万華鏡を作ります。

◎参加費：無料

◎申込み：当日受付

ネットワーク

NETWORK

---

## 関西ECOMAIL

第43号

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室（鈴木善次研究室）気付

〒582-0026 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

TEL/FAX 0729-78-3381 [直通]

第44号は、1998年5月12日発行予定。原稿の締切は5月2日です。